

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十八年八月一日発行（毎月一回一日発行）
第十三巻第四号（通巻第一四八号）

鈴



くろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第148号

8. 2006

白無垢

品川 鈴子

締切りのペンも握れず百足虫腫れ

虫しぐれお伽の王はみな愚か

書き出しの言葉探しを行合ゆきあい空

手もつかず行合空へ遠まなざし



行合の雲へ似通ふ二重^{ふたかわ}瞼^め
 灯台の灯矢に窪みて渦の潮
 淡紅を刷く下野^{しもつけ}のマスカット
 芒の穂手折れば絵になると言はれ
 白無垢の酔芙蓉^{ふつかよい}かげ宿^ふ酔^い
 濁り池緋鯉溜まりの縄張か



玉 鈴

大阪 師岡洋子

降られ来し顔の混み合ふ出開帳
恋雀野外舞台にこぼれけり
缶珈琲手にくるくると木の芽坂
板の間にあたるくるぶし粽結ふ
菖蒲湯の中より母の伊予ことば

兵庫 八木柊一郎

あをあをと田水をさなき蝌蚪の国
裸婦像の肌くもれる若葉冷え
半袖の女匂へり栗の花
風音のたとへば生絹朴咲けり
なかぞらを日風通へる朴の花

東京 安田とし子

衣更へて誰に逢ふともなき日かな
薫風や木目の著き道標
自戒また破りてしまふ麦の秋
草刈機草の微塵をはきながら
削ぐさきにほのと香のたつ新牛蒡

吟

愛媛 梁瀬照恵

シャンパンの泡の弾けや聖五月
乾杯のグラス透して青楓
炭焼きの火止めしてより若葉風
滑る足危うく渡る蝌蚪の沼

兵庫 山口庸子

大和路は祠を囲む麦畑
手から手へ煎餅ねだる孕鹿
チューリップ園児の帽に紛らわし
岩となる蝮は岩に張りつきて

神奈川 山崎辰見

長居して京菜漬など勧めらる
一菜は京菜で足れり寺籠
人溢る嗣治遺展聖五月
過疎なれど谷をまたぎて鯉のぼり
菖蒲湯の香りごと嬰渡さるゝ

香川 合川月鉢子

何代も続く菓舗の燕の巢
朝市に出かけて旬の鯖を買ふ
母の日の母にも言へぬことのあり
宮入りをすれば修まる荒神輿
棕櫚の花王者のごとく庭制す

大阪 赤木真理

針箱にからくりのあり春の雨
月命日欠かさず参り春時雨
げんげ田にあばれてみたき日もありて
引き出しに失せ物の出で花ぐもり
淡雪が父の言葉となつて降る

兵庫 秋田直己

碧い眼と一望の京春がすみ
どの宿も空き部屋はなく花の京
阿弥陀池静寂^{しじま}を破る墓
遠足の児等碧い日に話しかけ

愛媛 足利罇子

粧ふも行く当のなき花日和
譲られし木椅子に坐して落花浴ぶ
水害の畑守る老女花の冷え
春愁の長距離電話老姉妹
足裏にて筭探す土の中

愛媛 足利徹

白き腹くねりて荒れる鯉のぼり
鯉幟気ままさせじと繋がるる
欠伸してゐる風待ちの鯉のぼり
本家より分家の幟高々と

大阪 尼寄太一郎

春眠の醒めて浦島傘寿なり
自転車チューブに春の気を満たす
手を握る男の見舞春隣
駆け込んでハの字に散らす春の靴
霾風に乗り帰り来よ金糸猴

藥草歲時記

(二四七) ブドウ (葡萄)

市橋 章 子

葡萄食ふ一語一語の如くにて

中村草田男

ブドウは、世界で一番生産量の多い果物。食べてよし、醸しては至福の時をもたらしてくれる。

日本では九割を生食にするが、世界生産量の八割はワイン用になる。

アジア西部原産、落葉する性低木。枝の変形した卷ひげで他物によじ登り、葉は心臟形。初夏、花穂を出し黄緑色の小さな五弁花が集まって咲く。

緑色、又は紫色の円形の果実は液が多く、房状に垂れ下がる。枝に近い側がもっとも甘いので、房の先端が甘いと房全体が甘い。

「ブドウ」の和名は西域地方の古語 B u d a w が中国に渡り蒲桃、葡萄となり、これの音読みからという。

果汁は水分87%のほか、転化糖(ブドウ糖、果糖)、有機酸、ビタミン類、鉄やカリウムなどミネラルを豊富に含み、エネルギー補給、疲労回復に抜群の効果がある。

皮や種には抗酸化物質や血栓ができるのを防ぐポリフェノールが含まれ、種を絞った油は血中コレステロールを減らして動脈硬化を防ぐ。

ブドウを丸ごと発酵して作られるワインには、良質のポリフェノールが多量に含まれており、フレンチパラドックス(フランス人がバターやクリームを使った肉料理をよく食べ、喫煙者が多いにもかかわらず、心疾患による死亡率が低い)が報告されると、赤ワインブームをもたらすことにもなった。

イギリスでは、熟した実の汁(マスト)が、疲労回復、不眠症、むくみに民間薬として使われている。

欧州の保養地や自然療法病院では、ブドウの収穫期にブドウだけを食べて過ごす「ブドウ療法」が行われており、生活習慣病を改善するという。

うつくしき吐息ぐもりの青葡萄

伊藤 白潮

果皮が色づく前の未熟な葡萄の実、茂る葉のあいだに若い実房を下げる。その瑞々しさに俳人は心を寄せる。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」 北隆館

「食べて治す医薬大事典」 主婦と生活社

「花の歳時記」

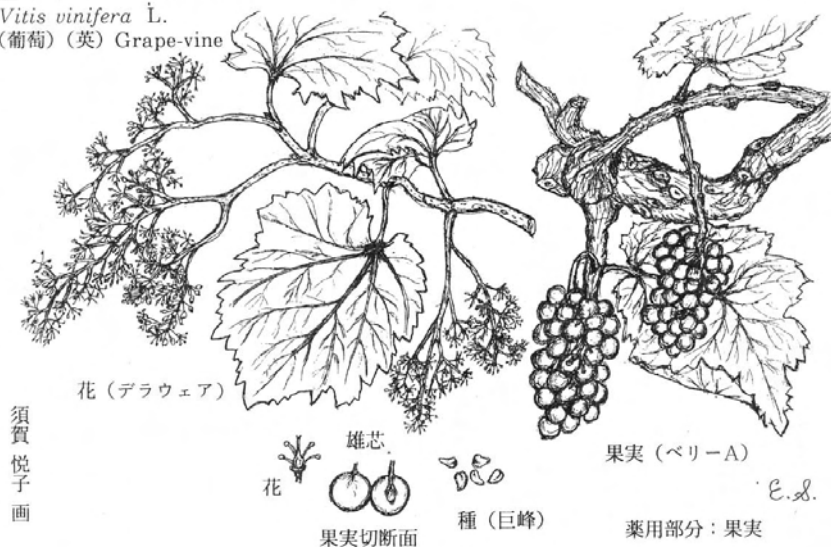
淡交社

著者略歴 神戸薬科大学卒

ブドウ〔ブドウ属〕(ぶどう科)

Vitis vinifera L.

(葡萄) (英) Grape-vine



黒きまで紫深き葡萄かな
 亀甲の粒ぎつしりと黒葡萄
 一つぶの葡萄おもたき別離かな
 雨に剪つて一と葉つけたる葡萄かな
 葡萄あまししづかに友の死をいかる
 ここに立つ受難キリスト葡萄摘
 葡萄垂れさがる如くに教へたし
 夫が持つ房より葡萄もらひ食ふ
 わが天蓋わが瓔珞の棚葡萄
 持ち寄りて房比べをり葡萄園

正岡 子規
 川端 茅舎
 前田 普羅
 飯田 蛇笏
 西東 三鬼
 山口 青邨
 平畑 静塔
 山口 波津女
 品川 鈴子
 大井 邦子
 ぐっけ

鈴の奏

品川鈴子選

薰風を入れて糊練る指物師 愛知 市川十二代

花山葵昔庄屋の水路跡

森青蛙棲む寺に座禅組む

空手着を日陰に干して髪洗ふ

ゆすらうめ故里はなれ幾年ぞ

靴の紐結びある間も夏鶯

青葉木菟二声森を深くする

携帯電話やめて顔あげ青田見よ

機関車の汽笛にゆれる花水木

機関車の蒸気に隠る花水木

タンポポの中にD51身じろがず

産休ではじめて漬ける青い梅

殿様の茶碗も出され朴の花

聞き慣れぬ地名も増えて春の雲

滞りなく夏茶会終わるたる

絵葉書を銀座で選ぶ薄暑かな

軒菖蒲俳誌の号を揃へ終ふ

兵庫 岩木 眞澄

大阪 今谷 脩

兵庫 井上加世子

香川 島内 美佳

カーナビに逆らふ遠出山笑ふ

退屈な犬に燕の宙返り

葱坊主直なる背伸び少年期

帰り道声一つせず遠足子

献血の血と引き換えに蓬餅

尻の先ほんのり濡れて磯遊び

すり鉢に溢れんばかりレタス和え

首かしぐ池畔の亀の花見かな

巖を囓む青き流れや雪解川

葛城山に夏霧流る三回忌

草抜けば蟻の天国崩れ落つ

み吉野や静御前の花小袖

春惜しむ吉野書院の能面と

天をつく塔の水煙樟若葉

桐の花喜寿の一行旅にあり

武者人形城の刻打つ花は葉に

墓壊す重機の唸り夏に入る

兵庫 伊勢ただし

兵庫 吉本 淳

愛媛 伊藤マサ子

香川 石川 裕美

母の日も孫が主役のケーキ店

そぼ降りて神戸まつりの延々と

渡りくる風の植田の米どころ

黄沙降り黒き手すりも薄化粧

花の藝散歩の犬と踏みゆけり

登り窯いまだ目覚めず若葉風

義経はこの村迂回風薫る

絹さやの筋を引きつつ拉致のこと

五月雨るる道行のごと師と吟行

キリスト像背にコンサート花茨

コーラスにアルトの男児うらけし

木々芽吹くゴスペルの声餌して

囀りに総身委ねて福祉村

朝曇り小式部内侍供養塔

膝手術横臥して見る春の雲

春光の歩行器つかひ窓開ける

庭先の花綻びて退院日

退院の車窓より見る花の雲

溢れむを納めし蕾紅き薔薇

金のシベ残し透けゆく白きバラ

子離れの予行に始む薔薇づくり

兵庫

岩田登美子

兵庫

土屋 利之

兵庫

津田 霧笛

兵庫

竹内 千春

岡山

岡 敏恵

レジ袋両手に見上ぐ燕の子

微生物の父の歯ブラシ捨てず待つ

長所ならいくつも言えて梅雨曇る

犬となる五寸あやめを嗅ぎたくて

涼やかに冷凍エジの尾の並び

千年の風雨に耐えし杉の膚

岸壁でかつおのたたきもてなされ

市職員にわか商人^{なまりぶし}生節

人魚かと思まがふ海女の白肌着

妙高の雪形はね馬くつきりと

道灌像こども狩衣濃山吹

青嵐悔み謡で友送る

新緑に一際目立つ花水木

庭先の開く牡丹に傘掛けて

数寄屋橋ありし道とや初夏の句座

鈴の音を担ぎ銀座に風鈴屋

風鈴を買ふ講釈を聞きながら

風止めばしばし思案の五月鯉

マンションの窓それぞれの鯉幟

男児なき我家二人の柏餅

しばらくは菖蒲湯の香の我腕

佐賀

森田 子月

埼玉

小田 知人

松本 清川

山形 麗子

片野 光子

東京

木野 裕美

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 十五句 塩出 眞一

*選句は全て 品川 鈴子

薫風を入れて糊練る指物師

市川十二代

職人技の盛んだった頃には、さしものやと呼ぶ細工師は、木の板をさし合わせ組み立てて家具をつくった。たとえば箱・机・箆箆・火鉢など。その綿密な仕上げに欠かせぬものが糊でした。炊いた白米を篋で根気よく練り、または膠にかわを煮たり、粘りや強度を加減するのが職人技の要で、それぞれ工夫のこらし処。その大切な作業は一種の秘伝。だが、薫風には窓を開け放つ。

青葉木菟二声森を深くする

今谷 脩

青葉木菟はフクロウ科の夏鳥で、青葉の繁るころ、繁殖のため日本に飛来する。主に山林で暮らすが、私が月に一度句会で行く明石城公園にもいて、日中はほとんど動かず、巢からやや離れた枝から巢を見守る。くりっとした目が愛らしい。用心深く雄と雌の呼び交わす声は、森を深く感じ

させる。

産休ではじめて漬ける青い梅

井上加世子

お産休みになり、ゆっくり家で過ごして、初めて浸けてみる青い梅は、職場しか知らなかった者に新鮮な香りと手触り。梅の甘酸っぱさは、悪阻のころを助けたり、これからの家族にも健全さをもたらすことでしよう。若々しい期待の膨らむ梅浸け。

絵葉書を銀座で選ぶ薄暑かな

島内 美佳

薄暑は、初夏の少し暑さを感じるくらいになった気候をいい、一年中で一番気持のよい時季である。作者は軽快な服装で薄暑の銀座に絵葉書を選んでいる。絵葉書は、風光明媚な所で買うのが普通であるが、「銀座で選ぶ」に意外性があり、旅行の楽しさも表現されている。いか（以下略）